

宇宙と結びつく地球の水

「水の自然誌」

E・C・ピルー著 古草秀子訳

科学のとき、地球儀の制作といっものがあつた。球体に細長い流線形の図面を幾枚も貼っていくとそこに海や陸地が誕生する。それを最後に地軸の台にはめこみ、ぐるぐる回す。小さく描かれた地形はめまぐるしく変化はするが、止めてもその一つ一つはもとのままだ。おまけに丁寧に全部に名前がついているため、最初から移動もせず、そこにあつたものに人間が後で苦労して整理してやったように思える。なんだかチャップリンの映画のようだが、今ふり返るとたしかにそんな心境だった。

そもそもその場所に川が流れ、湖や海があるとはどういうことなのか。カナダ在住の元大学教授でナチュラリストであるこの本の著者は、常に地球が宇宙空間にある惑星であることを忘れていない。たとえばダムが支えている膨大な水の重量は地球の自転に影響を及ぼしているそう。自然にあつた場所から主に自転軸に近い中緯度へと移動させられた大量の水により自転速度は速められ、この半世紀に一日の長さは〇・〇〇〇一秒縮まった。しかも貯水池が地軸に対照的に位置していないため北極と南



極がずれ、六〇秒動いてしまったという。地球の南北での経済格差と無計画な開発が、皮肉な結果をまねいている。

また、意外な仮説も述べられている。それによれば、これまで太陽系の外から重水素二十トから四十トのたくさん「雪玉」スノーボール（小彗星）が数秒ごとに地球の重量圏内へ入ってきていて、これがこのまま数億年つづけば、一万年ごとに三兆トの水を得るといふ。つまり、それだけの恵みがあつても地球上では水が汚染され、不足していることになる。

読み進むにしたがい、あらためて人間の愚かさに気づく。それは図面を貼ってから台座に置き、球体を回していた行為に似ている。本当は地軸を回していた行為に似てあり、太陽を公転しながら海も湖も、そして地下水も、今ある場所に必然的に形成されていったのだ。水は地球上の循環物だけでなく、宇宙と結びついた生命体そのものである。著者はそのことをわかりやすい科学の言葉で説明している。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）